

「こいこいちゃんと拳銃と」リストレ 主要登場表

椿本（尾崎）華蓮——尾崎家四女・四葉銀行

東岡支店行員

大竹将吾——機動隊へ零中隊へ隊員

尾崎康藏——尾崎家家長・尾崎産婦人科院長

尾崎圭子——康藏の妻

尾崎華織——尾崎家長女

尾崎華穂——尾崎家次女

尾崎華澄——尾崎家三女

尾崎千佳乃——康藏の母

平原育代——尾崎家家政婦

尾崎誠次——華織の夫・婿養子

尾崎優華——華織と雅次の娘

小園光恵——居酒屋へぐみの木へ女将

小園栄三——光恵の夫

小園里菜——光恵の孫娘

萌美——へぐみの木へ高校生アルバイト

大竹智子——将吾の母

カレン——トルコ嬢・将吾の妻

木村——将吾の巡查時代の先輩

新藤——四葉銀行東岡支店支店長

吉村——四葉銀行東岡支店行員

椿本信一郎——華蓮の夫

理恵子——桜塚の情婦

桜塚——銀行強盗犯

女——華蓮の実母

その他

○大阪市・西田辺商店街

営業を始めた飲食店がちらほらある夕暮れの西田辺商店街。

歩いてくる上品な雰囲気のお婦人、椿本華蓮（70）。

○居酒屋へぐみの木〈店前

こぢんまりとした居酒屋へぐみの木の少し前で立ち止まる華蓮。掛けられている準備中の札。華蓮しばしそこに佇んでいる。

やがて戸が開き、暖簾を持った女将、小園光恵（77）が出てきて、暖簾を掛ける。

光恵、視線を感じて振り向く。

光恵「はい？」

応じず、光恵をじっと見ている華蓮。

光恵「お一人でお越しですか。それやったらどうぞ、今から開店やよって」

無言の華蓮。不審げに彼女を見る光恵。

華蓮「暖簾の柄、あの頃といっしょなんやねえ」

微笑んでいる華蓮を見つめる光恵。やがて気づく。

光恵「華蓮ちゃん、あんたもしかして華蓮ちゃんか？」

頷く華蓮。

光恵「いや、あんた華蓮ちゃん——いやあ、ほんまにあんた……」

華蓮「そんな目で見んといてよ、お化けになるんはもうちよつと早いやから。お久しぶりです。お店、入ってもかまへん？」

光恵「も、もちろんや。けど、あんた、いやあ」

華蓮「孫にスマホで調べてもろうてん、西田辺にへぐみの木って居酒屋がまだあるかって」

光恵「そうかあ。さ、入り入り。うちも今な、孫娘といっしょにこの店やってるんよ」

二人、店へと。

○へぐみの木〳店内

カウンター端の席に座っている華蓮。

厨房で華蓮と向かい合っている光恵。

華蓮、店内を見まわす。

華蓮「サツカーのポスターが仰山貼ってあるなあ」

光恵「店中ピンクやろ。セレッソ大阪や。この子のおかげでうちもええ年こいてサポーターや」

苦笑しながら横に立っている孫娘の里菜（20）をコナす光恵。

里菜「ばあちゃん、萌美ちゃんもうすぐ来るから今日は店任せといて。お友達の横座つたらどない。いっぱい話しあるんやろー
ーいらっしやいませ！」

客が二人入ってくる。

華蓮「ええお孫さんやなあ」

光恵「上二人の男の子は勉強得意で大学まで
いってそこそこの会社に勤めてるんやけど、

この子だけはアカンでなあ。どうにかこうにか高校は出て、さてこの先どないしたもんやろって親も悩んでたら『ばあちゃんといっしょに店やりたい』とか言いよって」

華蓮「へーえ」

光恵「うん。そんで遊び半分でやらせてみたら筋もエエし、セレッソのサポーター大勢呼んで売り上げ伸ばすし、電子マネーやらの会計も設えてくれるし。このままこの子に継いでもろたらええかな、思うてなあ」

華蓮「そら、なによりやわ。旦那さんは？」

光恵「四年前や。前の日までナイトスクープ、ケラケラ笑うて見てたんやけど、朝起きてたら死んでた。アホらしいて涙も出んかったわ」

華蓮「そうかあ」

光恵「けどまた今日はなんで？」

華蓮「えーうん、さっき言うたやろ『お化けになるにはまだちょっと早い』って」

光恵「え、そしたらあんだ」

頷く華蓮。

華蓮「すい臓がんのステージ2。じわじわ進んでいってるみたいやわ」

光恵「ようならへんのか」

華蓮「みたいやわ。抗がん剤の治療もきついつて聞かし。けどこの年まで生きたら、思い残すこともないしなあ」

光恵「ほんまに？」

華蓮「え？」

光恵「思い残しがあるから来てくれたのところがうのん？」

見つめあう二人。

光恵「そうやごめん。電話せなあかんとこあるんや、ちよつとだけ待つとつてな」

店の奥、家屋部に消える光恵。

店内をぐるつと見回す華蓮。

華蓮「セレッソ大阪、か」

里菜「あの『かれん』ってどんな字書かはるんですか？」

華蓮「ん？ 難しい方の華っていう字あるや

ろ、分かる？」

宙に華の字を記す華蓮。

里菜「ああ、はい」

華蓮「あれに蓮の花の蓮って書いて華蓮」

また宙に蓮の字を書く華蓮。

里菜「へえ、素敵な名前。お姉さんの雰囲気
にすごくあつてます」

華蓮「ありがとう。けど『お姉さん』やなん
て商売上手やなあ、お孫さんは」

里菜「わたしより年上の人はみんなお姉さん
って呼ぶことにしています」

スマホを片手に戻ってくる光恵。華蓮
の隣に座る。

光恵「最近は何んでもこれやなあ」

華蓮「ほんまに」

光恵「あれから何年になるやろ」

華蓮「四十五年……をちょっと過ぎたんか
な」

光恵「そうか、もうそないになるかあ」

華蓮「うん」

萌美「おはざーっす」

高校生アルバイトの萌美（18）が店に入ってくる。

里菜「萌美ちゃん、早よ用意してや。今日は二人シフトやで」

萌美「えー、なんでえ。光恵ちゃんもいてるやろ——てか座ってるし」

里菜「ほらほら、早よ早よ。遅いのは猫でもするでえ」

萌美「なん、それっ！」

里菜「ザジのギャグとかええから！」

萌美「ふぁーい」

店奥に消える萌美。ウーロン茶のグラスに、少しだけ口をつける華蓮。

○メインタイトル

〈こいこいちゃんと拳銃と〉
ピストル

○大阪市内〈尾崎産婦人科医院〉外景

（TⅡ昭和29年）

大通りから路地を入ったところにある
木造の産婦人科医院。

○前同・診察室

妊婦を前にして、腹を触診している院

長の尾崎康蔵（40）。

尾崎「うん、順調順調。あと二か月や」

妊婦「はい、ありがとうございます。この頃
はもうよう動いて動いて」

尾崎「そうか。あんたの顔つき見てたら、ど

うも男の子みたいやなあ」

妊婦「やっぱり先生もそない思わはりますか。

うちもそないに思えますねん」

尾崎「上は女の子やったな」

妊婦「はい」

尾崎「一姫二太郎、けっこうやないか」

妊婦「はい」

微笑む妊婦。尾崎も笑う。

○帝塚山の高級住宅街

瀟洒な造りの邸宅が立ち並ぶ住宅街。
そのうちの洋館風の豪邸、尾崎家を物
陰に立ち、じっと見ている赤子を背負
った若い女。

× × ×

紺色の日野ルノー4CVデラックスが
ゆっくりとやってくる。カーポートにバ
ックで入るルノー。その隣には外国車
が止まっている。

尾崎が下車し、邸宅に入る。その様子
をじっと見ている若い女。

× × ×

家政婦の平原育代（30）が玄関から
出てきて門扉を閉める。若い女、その
様をじっと見ている。育代が玄関から
邸宅に入る。ぐずり始めた赤子を背に
その場を立ち去る女。

○文化住宅・外景

オンボロの文化住宅。その一階の居室

に入っていく女。

○前同・一〇三号室・室内

六畳一間の部屋。

継ぎ接ぎだらけのおくるみを着て、眠っている赤子。その横に俯いて座っている女。

小さな卓に戒名も書かれていない白木の位牌が一つ。

女「うっ、ううっ……」

赤子を抱きしめ嗚咽する女。

○尾崎家・廊下（夜）

赤子を抱えて走る育代。

育代「だ、旦那さま、奥様ああ！」

居間のドアを開ける尾崎圭子（38）。

圭子「なんやのん育代さん、騒々しい」

育代「あ、あのっ、あ、赤ちゃんが、お家の前にいっ！」

圭子「赤ちゃん？」

育代「はいい！ 門扉閉めようか思ったら、
お家の前にい！」

育代、圭子の前まで走って来て止まる。

圭子、育代に抱えられている赤子を見て。
て。

圭子「ほんまや、赤ちゃん、やね」

育代「はい」

見つめあう二人。

○街路（夜）

涙を拭いながら歩いていく女。

○尾崎家・居間（夜）

赤子をあやしながら抱いている育代。

部屋にいるのは他に尾崎と妻の圭子。

三人の娘長女華織（12）、次女華穂

（10）、三女華澄（5）。尾崎の母

千佳乃（70）。皆寝間着姿で。尾崎、

わら半紙に鉛筆で書かれた文面を読む。

尾崎「『——夫を病で喪い、女手一つでこの

先この子を育てていく自信がございません。

いっそのこの子を手にかけ、わたしも命を絶とうと思ったことも幾度もありました。薄情極まりない親だとお蔑みください。尾崎様のご厚情もて、この子をよろしくお願い申し上げます。不詳の親として尾崎様におすがりするより他にすべはございません。どうかどうか、この子をよろしくお願いいたします』——って言われてもなあ」

華澄「育ちゃん、その子男の子？ 女の

子？」

育代「女の子ですよ、お嬢様」

華澄「そっか、女の子か」

華穂「パパ、その子どうするん？」

尾崎「んう、そやなあ」

華織「やっぱり施設？」

尾崎「んう、そやなあ。そういうところの環境もまだまだ整ってないって聞くなあ。まあ、とりあえず明日警察行ってこなしやあないわな」

華澄「ゲームシヨ入れられるんかその子！」

尾崎「刑務所って。どこでそんな言葉覚えてくるんや華澄は」

華織「大丈夫やで華澄。刑務所入れられたりせえへんよ」

華澄「よかったあ」

千佳乃が歩を進め、育代の抱いている赤子を見る。

千佳乃「育代さん」

育代「はい」

千佳乃「あんたの友達で、乳が出て出て困ってる人がいてるって言うてたな」

育代「あ、はい。昔からの友達で利代ちゃん」

尾崎「ああ、うちで子供取り上げた上原利代さんか」

育代「はい。そろもうお乳張って張って。赤ん坊になんほ飲ませて出てるんやって困ってます」

尾崎「ちょっとお母ちゃん」

眠っている赤子を見つめる千佳乃。

おくるみを触る。

千佳乃「継ぎ接ぎだらけやけど、よう綿が入
ってるわ」

千佳乃を見つめる尾崎家の誰も。

○尾崎家・食堂（朝）

〈TⅡ昭和34年〉

大テーブルを前にした尾崎家の

朝食。その中に幼稚園の制服を着た五

年前の赤ん坊、華蓮もいる。

華蓮「ごちそう様でした！ 育ちゃん、今日
の朝ごはんもおいしかったわ！」

育代「おおきに、ありがとうございます
す。？」

華蓮「なあなあ、育ちゃんは血液型何型？」

育代「え、なんでそんなこと訊かはるん
です？」

華蓮「あんな、今日な、幼稚園で血液型調べ
る検査があるん。そんでな、後で先生から

な、自分の血液型教えてもらえるんや。な
あ、育ちゃんの血液型ってなんなん?」

育代「育代はB型ですよ」

華蓮「そっかー、わたし何型なんやろなあ。

なあパパは何型?」

尾崎「え——何やったかなあ、忘れてしもう
たわ」

華蓮「あかんなあ、お医者さんのくせに。そ

したらママは?」

圭子「ママも忘れてしもうたわ」

華蓮「なんや、二人とも忘れんぼやなあ」

尾崎「今度ちゃんと調べとくわ」

育代「お嬢様、そろそろ幼稚園バスのお時間
ですよ」

華蓮「はい」

椅子からびよんと飛び降りる華蓮。

華蓮「そしたらパパ、ママ、ばあば、華織姉
ちゃん、華穂姉ちゃん、華澄姉ちゃん、行
ってきまーす!」

育代に手を引かれ、食堂を出ていく華

蓮。沈黙に包まれる食堂。

華織「分かっているんやろ、お父さん」

尾崎「ああ、一歳半の時に調べた。華蓮はO型や」

千佳乃「ええ機会や、今日言え」

圭子「お義母さん」

千佳乃「いづれ分かることや。華織」

華織「なに」

千佳乃「おまえその年で親と生さぬ仲やと知らされたらどんな気持ちになる」

華織「それは——」

また無言になる家族。

華澄「それでも、それでもな——それでも華

蓮はわたしの妹や。妹なんや、そやろ」

ぼろぼろと涙をこぼす華澄。隣の華穂が華澄の頭をなでる。

華穂「わたしの妹は華澄と華蓮の二人やで」

華織「けど、華蓮がA型やったらどうやったやろ。つじつま合うわけやん」

千佳乃「そんなもんいづれ分かることや」

ずっと味噌汁をすする千佳乃を誰も
が見つめる。

○大阪市・長居公園テニスコート

〈TⅡ昭和46年〉

試合中の華蓮。ボールを幾度かバウンドさせサーブの構えに入る。高々と上げたボールを思い切り打つ。対戦相手が一步も動けないほどのサービスエース。両手を突き上げる華蓮。

フェンスの外で応援していた尾崎、圭子、華織、華織の夫、誠次（31）、二人の娘、優華（6）、華穂、華澄、が拍手をする。大盛り上がり家族に向かって満面の笑みでVサインをする華蓮。

○尾崎家・食堂（夜）

大テーブルの上に握り寿司を始め、豪華な料理が置かれている。座っている

尾崎家の面々。華蓮が立ち上がる。

華蓮「えっと、今日は、みんな応援に来てくれてありがとう」

千佳乃「わたしや行ってへんけどな」

華蓮「もう、ばあばはほんまにい」

フツツと笑う千佳乃。

言葉を発しようとするが、うつむいて

しまう華蓮。やがて、顔を上げる。涙

ぐんでいる。

華蓮「今日は市の大会で優勝することができました。ここから先はほんまに強い学校の選手が出てくるから、勝ち上がるのは難しい思うねんけど、一生懸命がんばるわ。それから、それからな。こんなん言うの初めてやけど、ええ機会やし、言うけど——あんな、わたしな、この家の前に捨てられて、ほんまによかったって思ってるんや。そやなかったら、わたし、わたしは……」

ぼろぼろと涙をこぼす華蓮。もらい泣

きをする華織の夫、誠次。

華織「なんであんたが泣いてるのよ」

優華「ほんまや、華蓮ちゃん勝ったのに、なんで泣くん。パパおかしいわ」

誠次「そやかて、そやかてやなあ……」

華織「あんな、華蓮は捨てられたりしてへんの」

誠次「え」

華織「コウノトリが運んでくれたんや。なあ華澄」

華澄「そうや。あの頃わたしちばんなのが嫌でなあ。毎晩お月様にお祈りしてたんや、妹ができますようにって」

華穂「そやったなあ。けど、うちら三人とも運動オンチやん。華蓮みたいなテニス選手が妹で誇らしいわ」

千佳乃「これでもうちつと勉強出来たら言う事なしやけどな。英語で赤点とるようではな。先が思いやられるわい」

華蓮「もう、ばあばはほんまにうるさい」

笑い声に包まれる食卓。

育代「さあさあ、皆様お待たせいたしました
ー」

育代が大皿に盛った鯛の姿造りを持って
やってきて、それを卓の上に置く。

華蓮「うわあ、凄い！ 鯛やで、見てみ、優
華ちゃん！」

優華「すっご！ 頭立ってるし」

華蓮「育ちゃんがこしらえたんか？」

育代「決まっていますやろ。これくらい朝飯前
でございます。華蓮お嬢様の祝勝会に腕ふ
るわんでどうするんですか。たっぷりお召
上がりください」

育代をじっと見つめる華蓮。立ち上が
り、ガバツと育代に抱きつく。

育代「ちよ、ちよっとお嬢様」

華蓮「わたし、わたしな、育ちゃんのこと大
好きや。ほんまに、ほんまに大好きや」

育代「わたしも華蓮お嬢様のことが大好きで
すよ」

育代、優しく華蓮の髪を撫でた後、両

肩を掴み、

育代「さあさ、育代が心を込めて作った料理、
存分にお食ください、お嬢様」

華蓮「うん、すっごいお腹へってるねん。い
ただきまーす」

尾崎「こら、慌てるな華蓮」

華蓮「もう、なによおパパ」

尾崎「乾杯してからや。はい、みんなグラス
持って持って——ええか、準備できたか。

それでは、この度の華蓮の優勝を祝って、

かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

唱和してグラスを掲げる家族。

○尾崎家・外景（夜）

食堂に灯っている明かり。にぎやかな
笑い声が聞こえる。

○前同・華蓮の部屋（夜）

八畳ほどもある大きな一人部屋。床に

四つ布団を敷き、胡坐をかいてポーカ
ーに興じているパジャマ姿の四姉妹。

華澄「そりやつ、スリーカード！」

華蓮「んははは、甘いな華澄姉ちゃん、スト
レートフラツシユじゃあつ！」

華澄「ああつ、負けたあ！」

後ろにそっくり返る華澄。

華織「さあ、もうだいぶと遅うなつたし、そ
ろそろ寝よかあ」

華蓮「えー、まだええやーん」

華穂「はい、もう終わり終わり。今日はあん
たも疲れてるやろ。ええ加減に寝な」

華蓮「しょうもないなあ」

布団にもぐりこむ四姉妹。

華織「そしたら電気消すよ」

華蓮「なあ、ちよつと待って。姉ちゃんらに
話しときたいことがあんねよ」

華澄「なんや、恋の悩みか」

華蓮「そんなんちゃう。これから先のこと
や」

華穂「これから先？」

華蓮「うん。わたしな、姉ちゃんらと違って、

高校出たら就職しよって思ってるんよ」

華織「就職。なんでまた。勉強イマイチでも

うちの財力やったら、行ける大学も短大も

なんぼでもあるで」

華穂「そうや、パパに頼んだら二つ返事や、

そんなもん。大学行くのが嫌やったら家事

手伝いでもええやんか」

華澄「遠慮してるんか、華蓮。そんなんはな

しやで」

華蓮「ううん、そうやないねん。あんな、姉

ちゃんらは自分の勉強の力で行く道決めた

わけやろ。そやからわたしも自分の力で

く道進んでいきたいねん」

華穂「そうかあ。華蓮は華蓮でいろんなこと

考えてるんやなあ」

華澄「なにかやりたい仕事あるんか」

華蓮「うん、頑張っつてな、簿記の勉強本気で

しよかって思ってるん。そういう塾がある

んよ。それで銀行とか証券会社に入れたら
って思ってるんよ」

華織「簿記か。確かにええかも。これからは
資格の時代やって旦那がよう言うてるわ」

華澄「華蓮はなんで知らん、数字にだけは
強いからな」

華穂「そやな。パパが友達とやってる麻雀の
点数計算なんかすぐ覚えたもんな。ボーリ
ングのスコア付けもじきに覚えたし。簿記
は向いてるかもな」

華蓮「数字にだけってなによ——認めるけど。
あんな、明日パパとママとばあばに言いた
いねん。そのときな、味方になってほしい
ねんよ、お姉ちゃんらに。あかんか？」

華澄「——よっしゃ、かわいい妹の頼みやな
いの。応援してあげよやおまへんか。なあ、
華織姉ちゃん、華穂姉ちゃん」

頷く二人。

華織「その代わり最初のボーナス出たらなん
かプレゼントしてやあ」

華穂「そやなあ、ハンドバッグとかええなあ」

華澄「あ、そしたらうちはブランド品の財布がええわ」

華蓮「うわっ、なにそれ」

華織「親しき中にも礼儀ありっちゅうやつや」

華蓮「言葉の遣い方違うと思う……」

笑う姉三人。やがて華蓮も笑いだす。

○尾崎家・尾崎の部屋（夜）

椅子に座り背もたれを倒して目を瞑っている尾崎。オーディオセットのスピーカーから、いしだあゆみの『ブルーライト・ヨコハマ』が流れている。そこへドアをノックする音。

尾崎「はい、どうぞ」

部屋に入ってくるパジャマ姿の華蓮。ドアを閉める。

尾崎「なんや、どないした華蓮」

ボリリュームを下げる尾崎。

華蓮「この前はありがとう、パパ」

尾崎「ああ。四姉妹連合艦隊には勝てんわ

い」

華蓮「ばあばがすぐに賛成してくれてびっくりした」

尾崎「うん、お袋はおまえといっしょのこと考えてたのかもしれないなあ。大学行かせるとより職に就かせた方がおまえのためになるって。ずっとそう思ってたのかもしれない」

華蓮「そうなんやろか」

尾崎「おまえにとって最善の道を心底考えてくれてたんや。そない思うと親としてちと恥ずかしいな」

華蓮「——なあ、パパ」

尾崎「なんや」

華蓮「わたしの裸、見たいか」

尾崎「は、裸ってなんや急に」

華蓮「いっしょにお風呂入ってたのって小一くらいまでやったよな」

尾崎「ああ、そうやな」

華蓮「男として、十七になったわたしの裸、
みたいか。正直に言うて」

尾崎「アホ言うな、けどな」

華蓮「けど、なに」

尾崎「父親としてやったら見てみたい」

見つめあう二人。どこかホツとして微
笑む華蓮。

華蓮「なんや、しょうもな。それやったら見
せてあげませーん。どこに親に裸見せる十
七の娘がいるのよ。答え間違えたな、パ
パは」

尾崎「――間違えたりしてやせんわい」

華蓮「わたし、好きな人とか、付き合ってる
人はまだいてへん。けどけっこう告白され
たり、ラブレターもらったりはしてるんよ。
全部断ってるけど」

尾崎「そうか」

華蓮「あ、なんかホツとしてるパパ。かわい
いなあ」

尾崎「親をあんまりいちびるな」

華蓮「わたしな、パパみたいな人を恋人にして、バージン捧げて、結婚するのが夢や」

尾崎「バ、バージンっておまえ」

華蓮「あははっ、おやすみ」

尾崎に近寄り、頬にキスをして部屋を出ていく華蓮。

尾崎「答え、間違えたかな——」

苦笑して頬を撫でる尾崎。流れ続けている『ブルーライト・ヨコハマ』。

○あけぼの荘・外景（深夜）

〈TⅡ昭和47年〉

木造のボロアパートである。二階の一室に電気がついている。

○前同・二〇二号室（深夜）

座卓を前に白飯とたくあん、味噌汁をかきこんでいる大竹将吾（18）。母親の智子（40）がその前に座ってい

る。

智子「そないに慌ててかきこまんでもええが
な。のどつめるで」

味噌汁をズズツとすする将吾。

将吾「お魅ってな」

智子「ん？」

将吾「味ついてないのに、なんでこんなに旨
いんやろな」

智子「それは、お母ちゃんの味噌汁が旨いか
らや」

微笑んでいる智子を見る将吾。たくあ
んをバリボリと咀嚼しながら、白飯を
かきこむ。

○街路（深夜）

荷台に新聞を乗せ、配達をしている将
吾。その姿に親子の声が重なる。

智子（声）「卒業まで続けるつもりなんか、

新聞配達」

将吾（声）「あかんのか」

智子（声）「達也兄ちゃんもずっと仕送りしてくれてるんやし、そんなに無理せんでもええんやで」

将吾（声）「別に無理なんかしてへん。おか
んこそ」

智子（声）「なにい」

将吾（声）「工場であんまり無理すなよ。ほ
な、行ってくるわ」

智子（声）「うん、気いつけてな」

暗闇の中、新聞配達を続ける将吾。

○四葉銀行・東岡支店

〈TⅡ昭和48年〉

新入社員の挨拶が行われている開業前
の行内。同期四人の最後に華蓮が挨拶
をする。

華蓮「尾崎華蓮です。先輩方からご指導いた
だき、一日も早くお客様から信頼を得られ
る銀行員になりたいと思います。今日から
よろしく願います」

深く頭を下げる華蓮。拍手がわく。

○警察学校・運動場

屈んで十キロの土嚢を肩に負い、百メートルの距離をその姿勢のまま進んでいく新入生たち。その中に将吾もいる。苦しくなり、途中で少し膝を上げて進む将吾。

指導教官「なにをやつとるんじゃ大竹え！」

将吾の背中をけり上げる教官。地面に

突っ伏す将吾。

指導教官「なにをズルこいとるんじゃ！ 分

からんと思うるか、おらあ！」

将吾の襟の後ろを掴み、ずるずる引き

戻していく教官。往復ビンタをする。

指導教官「最初からじゃあ大竹え！ そんな

気持ちや体力でなあ、善良な市民を守るる

思うとるんかあ！」

将吾「はいっ！」

また土嚢を肩掛けにして、汗まみれの

顔で進んでいく将吾。

○大阪市・東岡派出所・外景

〈TⅡ昭和49年〉

自転車が二台停まっている。

○前同・派出所内

デスクの椅子に座り、書類を読んでいる警察官となった将吾。向かい合っている巡査の木村（48）が新聞を読んでいる。

木村「あれから早や二年かあ」

顔を上げる将吾。将吾に新聞を見せる

木村。

木村「千日ビル火災や。死亡者合計百十九人。

ほんまに惨い火事やったなあ」

将吾「防災設備が全く不十分だったと報道されたのを覚えています」

木村「アルサロから出火や。人間の欲に危険

への対応はまだまだ進んでないっちゅうこ

つちやなあ。なあ、大竹。おまえアルサロ
行ったこと——あるわけないわな」

書類を閉じる将吾。時計を見る。午前
十時を指している。

将吾「警ら行ってきます」

木村「おう、頼むわ」

一人になる木村、ふふッと笑う。

○路上

自転車に乗り警ら中の将吾。帝塚山近
辺に入る。瀟洒な邸宅が立ち並ぶ住宅
街を自転車で行く将吾。尾崎邸の前で
自転車を止め、豪奢な二階家を見やる。
また自転車をこぎ始める将吾。

○東岡派出所・内

デスクを前にしてラーメンを食べてい
る木村。ラーメンとチャーハンとギョ
ーザを食べている将吾。

将吾「あの、木村さん」

木村「なんや」

将吾「いつもすみません」

木村「聞き飽きた」

将吾「すみません」

木村「機動隊合格して出世したら、満漢全席

でもおごつてもらおうかいの。ふかひれスー

プ到北京ダック。楽しみやのう」

将吾「はい、きつと」

木村「そうや。おまえこの前誕生日やった

な」

将吾「はい」

木村「晴れて二十歳じゃ。呑み行こか」

将吾「酒を、ですか」

木村「酒を呑まいで何を呑むんじゃ。三ツ矢

サイダーか」

将吾「はあ」

笑い、旨そうにラーメンをすすする木村。

○へぐみの木 店内（夜）

カウンター席に座り、ビールを呑んで

いる将吾と木村。

木村「大竹よ、おまえ次男坊やったな」

将吾「はい。兄は鉄工所に勤めています」

木村「そうか。射撃の腕には自信があるって
言うてたな」

将吾「はい、年次トップは常に譲りませんで
した」

木村「そうか——通達が回ってきてな。零中
隊というのが再来年機動隊で発足する」

将吾「零中隊、ですか」

木村「ああ。市民に命の危険が迫るような大
事件が勃発したときに、犯人を狙撃して確
保するのが主たる部隊や。入隊の条件に次
男以下であること、とあった。この意味が
分かるか」

将吾「——はい」

木村「目指すか」

しばらく無言でいる将吾。やがてグラ
スをグツとあおり。

将吾「はい」

小さく頷く木村。

木村「給与はだいぶと上がるらしい。まあ親孝行なんやら親不孝なんやら」

しめ鯖を口に入れる木村。

木村「くーっ、このしめ具合、たまらんなあ。

大将、女将、何回食べてもここのキズシは絶品やで」

光恵「おおきに、万年平警官ちゃん」

厨房では光恵の夫、小園栄三（33）

が造りを拵えている。

木村「きつつー。ほれ、大竹、おまえもどん

どんやれ。零中隊入隊前祝いや」

将吾「はい」

しめ鯖を口にする将吾。

木村「どないや」

将吾「旨いです」

木村「そやろ。呑まんかい」

将吾のグラスにビールを注ぐ木村。

将吾「はい」

将吾、グラスのビールを半分ほど呑む。

木村「おまえさん、イケる口やったんやな。

今日がほんまに呑むの初めてか」

将吾「二十歳まで飲酒は法律違反ですから」

木村「警察官の見本じゃおまえは。大将、女

将、大阪には優秀な警察官がいてるぞお。

安心してこれからも商売してやあ」

光恵「はいはい、木村ちゃんのお墨付き、ありがとう胸に刻んでおきますわ」

木村「いや女将。洒落抜きでな、この大竹将

吾巡査はなかなかの男や。この国背負う若

者や。ちゃんと見たって。ほら大竹、女将

の目えちゃんと見んかい」

見つめあう将吾と光恵。

光恵「ほんまや。キラキラ澄んだええ目して

はるわ。出世まちがいなし。万年平の誰か

さんとは大違いや」

木村「誰かさんって誰やねーん」

小園が将吾を見て、少し口元をほころばせる。グラスのビールをあおり、空

にする将吾。

○四葉銀行・東岡支店・裏口前（夕方）

〈TⅡ昭和50年〉

仕事を終え、裏口から出てくる二十一才になった華蓮。両手を上げ伸びをする。

華蓮「んあーっ、今日も一日お疲れ様でした。

わ、た、し」

歩き出そうとする華蓮に、後ろから声をかける支店長の新藤（45）。

新藤「そらそら、ご苦労さんやったなあ」

振り返る華蓮。

華蓮「支店長」

慌てて頭を下げる華蓮。

新藤「呑みに行かへんか、帝塚山尾崎御殿の

こいこいちゃん様」

華蓮「え、え？」

新藤「連れていきたい店があんねや」

にかッと笑う新藤。

○へぐみの木〳店内（夕方）

カウンター席に座り、一人で呑んでいる将吾。小園が造りを拵えている。

光恵が厨房から造りの盛り合わせを置く。

光恵「はい、マグロ、カンパチ、ヤリイカの盛り合わせ。サービスでクジラも付けといたでえ」

将吾「クジラ、ですか」

光恵「そや。食べたことあるやろ」

将吾「はい。母が揚げたり、焼いたりしたのを」

光恵「お造りは？」

将吾「ないです」

光恵「そうかあ。シヨウガ醤油が入った小鉢があるやろ、それで食べてみ。おいしいでえ」

将吾「はい」

言われたとおりにして食べる将吾。

光恵「どない？」

将吾「旨いです」

光恵「そやろお」

顔を見合わせて笑う二人。

光恵「大竹さん、一人ででも来てくれて嬉し

わあ」

将吾「いえ、木村さんは今日娘さんの誕生日

でホームパーティーですから」

光恵「はっ、下駄の裏にマル書いてチョンし

たみたいな顔でホームパーティーとか笑か

しなっちゅうねん」

吹き出す将吾、小園も。

光恵「あ、言いつけたろ」

将吾「やめてください、怒られます」

三人、笑う。

○西田辺商店街（夕方）

肩を並べて歩いている華蓮と新藤。

新藤「迷惑やったかな、急に誘ったりして」

華蓮「いえ、そんな。とんでもないです。あ

の、支店長」

新藤「なんや」

華蓮「さっきの『こいこいちゃん』ってなんですか」

新藤「ああ。わし、船場の本店——とは言わんな、中店くらいの家になまれてな。そんな言い方ないけどな」

華蓮「船場」

新藤「そや。七人きょうだいの末っ子のあかんとたれや。いちばん上の佳代姉ちゃんがいとほん。次の幸代姉ちゃんがこいとほん。

二人の兄貴挟んで三番目の里代姉ちゃんがこいちゃん。で、すぐ上の四女の雅代姉ちゃんがこいこいこいちゃんや。そんな呼び方するんや、船場は」

華蓮「へえ。そしたら支店長は」

新藤「わしか？ わしはさんぼんや」

華蓮「さんぼん、ですか」

新藤「三番目のぼんさんやから、さんぼん。単純やろ」

華蓮「たしかに」

ククツと笑う華蓮。新藤も笑う。

新藤「そやから四女の尾崎華蓮さんは、勝手にこいこいちゃんって呼んでるんや」

しばらく無言で歩いていく華蓮。

新藤「気に触ったか？」

華蓮「いえ、かわいいですね、こいこいちゃん。けど、行内でそない呼ばんといてくださいよ」

新藤「ほんまやな。氣いつけとくわ」

笑いながら商店街を歩いていく二人。

○へぐみの木〓店内（夕方）

暖簾をくぐる新藤と華蓮。

新藤「こんばんはー」

光恵「あら、新ちゃんいらっしやい。またえらいお見限りやったやないのん」

新藤「それを言いなや。こう見えてなかなか忙しい身なんやから」

光恵「そらそら、お忙しい中お越しいただきましてありがとうございます——なによ今

日はえらい別嬪さん連れて」

新藤「んふふ、そやろ。驚きなや、こちらに
おわすは、帝塚山尾崎御殿の美人四姉妹の
四女、華蓮お嬢様や」

光恵「いやあ、尾崎先生ところの！ やつと
連れてきてくれはったんや、新ちゃん」

会釈をする華蓮。彼女をチラッと見る
将吾。

× × ×

向かい合ってテーブル席に座り、造り
の盛り合わせを前にして吞んでいる華
蓮と新藤。

華蓮「どれもおいしい」

グラスのビールに口をつける華蓮。

新藤「こういう店は初めてか、尾崎さん」

華蓮「はい。一回来てみたいなって思ってた
んです。あ、二人のときはこいこいちゃん
でいいですよ。なんやわたし、その呼び方
気に入ってしまいました」

新藤「そうか。どや、ここの料理旨いやろ、

こいこいちゃん」

華蓮「うん。めっちゃおいしいわあ、さんぼん」

声を出して笑う二人。

膳を持ってくる光恵。串揚げとだし巻き卵の皿をテーブルの上に置く。

光恵「なんや、ええ雰囲気盛りに上がってるやないの。氣いつけや尾崎のお嬢様。この人こう見えてけっこうスケコマシなんやから」

華蓮「ええっ、支店長そうなんですか!？」

新藤「ちよつと女将、こいこいちゃん本気にするがな!」

光恵「部下の若い子口説いて自分のものにしよかなんて思う不埒な支店長は即逮捕や。

なあ、大竹君」

将吾に話しを振る光恵。

新藤「逮捕って、こちらは?」

光恵「東岡派出所にお勤めの大竹将吾巡査や。

このあたりの治安守ってくれてはる、ピチ

ピチに活きのええ警官さんや」

新藤「ああ、そうですか。これはこれはいつも日々のお勤めご苦労さんです——ああ、そない言うたら見覚えありますわ。前にもう一人の巡査さんとうちにもご挨拶来てくれはりましたよね。わたし、四葉銀行東岡支店の支店長、新藤です」

将吾「はい。今後ともよろしくお願いいたします」

頭を下げる将吾。

新藤「こちらこそ、改めましてよろしく願います」

頭を下げる新藤。華蓮もそれに倣って。

将吾と華蓮の目が合う。少し微笑む華蓮。再び、頭を下げる将吾。

○東岡派出所

座っていた木村が立ち上がる。

木村「ほな、警ら行ってくるから」

将吾「はい、お気をつけて」

派出所を出、自転車に乗って警らに出
かける木村。

○四葉銀行・東岡支店・行内

十二時、六人いる受付女性行員のうち、
華蓮を含めた三人が立ち上がる。

華蓮「そしたらお昼、お先です」

そこに戻ってくる行員の吉村（19）
が、華蓮のところへ行く。

吉村「あの、尾崎先輩」

華蓮「なに、吉村くん」

吉村「さっき、カブ乗って信号待ちしてたど
きに、見つけて拾ったんですけど」

財布を差し出す吉村、受け取る華蓮。

華蓮「これ、どこに落ちてたん？」

吉村「すぐそこ、東岡交差点の歩道です」

財布を開ける華蓮。

華蓮「五万円も入ってるやん！ 中見たん吉
村くん？」

吉村「はい」

華蓮「それやったらすぐに交番届けやんでど
うするん！」

吉村「やっぱり、そうですね」

華蓮「『やっぱり』やないって！ ひとの落
としたお金をなんやと思ってるんや、あん
たは！ 支店長、ちよつと出てきます！」

駆け出して銀行を出ていく華蓮。

新藤「吉村あ」

吉村「はい」

新藤「こいこい——尾崎先輩の言葉、ありが
たく肝に銘じとけよお。さあて、わしもそ
ろそろ弁当遣わせてもらいましょかいなあ。
落とし主無事出てきたらええなあ。なあ、

吉村「

吉村「はい」

椅子から立ち上がる新藤。

○歩道

財布を手にして懸命に走っていく華蓮。

○東岡派出所

将吾が座って書類に目を通してゐる。
そこに息せき切って入ってくる華蓮。

華蓮「あのっ！」

華蓮を見る将吾。

将吾・華蓮「あ」

気づき、見つめあう二人。

華蓮「あ、あの、四葉銀行東岡支店の尾崎と
言います。先ほど、うちの外回りの者が、
落ちていた財布を拾いました。すぐにこち
らに届ければよかったです、そのまま
行内に持ち帰ってしまいました」

将吾「そうですか。どうぞお座りください」

華蓮「はい」

椅子に座る華蓮。そこにキキッと自
転車のブレーキ音。大汗かいて入って
くるおばちゃん。

おばちゃん「さ、財布届いておまへんやろ
か！ さつき信用金庫で五万円下ろした
後に落としたみたいですねん。あああ、う

ち、どうしよお！」

華蓮「あの、もしかしてこの財布ですか」

「財布を差し出す華蓮。おばちゃん、財布を受け取る。」

おばちゃん「ああつ、これです！ 五万円入ってますう！ 間違いなしにうちの財布ですつ。ほら、ほれ、見てください、住吉さんのお守り入ってますしやろ。これ、これな、今年の正月に次男の正武が買うてくれましたん、嘘やおまへん！ これはほんまにうちの財布ですう！」

将吾「あの奥さん、まずは落ち着いて。事情は分かりました。その椅子に座りましょうか。遺失物の受け取りには手続きが必要ですから」

おばちゃん「手、手続きって、うち取り調べ受けるんですかあ！ これは間違いなしにうちの財布です！ 言うてますやろ、住吉さんに初詣行って、おみくじ引いたら大吉で、その後正武が買うてくれたんです。嘘

やおまへん！」

半べそをかくおばちゃんの両肩を優しく掴む華蓮。

華蓮「うん、うん、この財布は間違いなしにお母さんの財布ですよ。ほら、この制服見てください、わたし、四葉銀行東岡支店の尾崎って言います。この財布うちの者が拾ったんです。それで、うちが今ここに届けて来たところなんです。はい、一回大きく深呼吸しましよか。はい、吸って、はいって。吸って、はいてえ」

華蓮の言葉に合わせて深呼吸を繰り返すおばちゃん。その様子を見ている将吾。

○前同・外

何度も頭を下げ、自転車に乗って去っていくおばちゃん。並んで立ち、見送っている将吾と華蓮。

華蓮「昼休み、終わってしまいました」

将吾「そうですか、すみません」

華蓮「いえ、だいじょうぶです。けどよう喋るおばちゃんやったわあ」

将吾「ほんまに」

見交わし笑う二人。

華蓮「ほんまに警官さんやったんですね」

将吾「嘘やって思ってたんですか」

華蓮「そうやないけど、制服姿見たら実感するっていうか。似合ってるっていうか」

将吾「——自分、あの日へぐみの木で初めてカンパチ食べました。旨かったなあ」

華蓮「そうなんですか。わたしも大好きなんです、カンパチ」

将吾「クジラの刺身も初めて食べた。これも旨かったなあ」

華蓮「え、なにそれ。うち食べてへんし、クジラの刺身とか」

将吾「あ、そうなんですか」

頷く華蓮。

将吾「今日もあるやろか。電話して訊いてみ

よかなあ」

華蓮「うん、訊いてみてよ」

将吾を見る華蓮。ニカッと笑う。

○へぐみの木〳店内（夜）

カウンター席に隣り合って座り、楽し気に呑み食いしている二人。

華蓮「なあ、次のお休みっていつ？」

将吾「明後日の日曜日です」

華蓮「そうなん！ そしたらいつしよにボウリング行かへん？」

将吾「ボウリング、ですか」

華蓮「あかんの？」

将吾「いや、自分やったことないんで」

華蓮「へえ、今時珍しいなあ。大丈夫、うちがちゃんと教えてあげるさかい。な、いこ
うや」

将吾「——はい」

○ボウリング場

プレーを始めた華蓮と将吾。将吾の力
まかせに投げたボールがガターになる。
大笑いする華蓮。

華蓮「力任せに投げたらええいうもんやない
で。あんな、レーンに三角マークがあるや
ろ。これが目安。これの、真ん中から三番
目くらいのところのちよい先狙ってやな」

構えに入る華蓮。しなやかなフォーム
でボールを投げる。ストライク。

華蓮「な」

コクンと頷く将吾。

将吾、豪快なフォームでボールを投げ
る。剛球がピンを全て跳ね飛ばす。

華蓮「うわあ、すごいやん！」

拍手をする華蓮。照れ笑いの将吾。

○路上（夜）

肩を並べて歩いている二人。

華蓮「一日で追い越されてしもうた。なんな
ん、三ゲームでターキー五回って」

将吾「すみません」

華蓮「いや、別に謝らなくてもええけど。でもさすがに警官さんやなあ。運動神経抜群やん」

将吾「的を狙うのは得意かもしれませんが。射撃は常に年次トップでしたから」

華蓮「へーえ、そうなんや」

将吾「はい。それもあつて機動隊の——機動隊に入る試験を受け、合格しました」

華蓮「へえ、機動隊に入るんか」

将吾「はい」

華蓮「そっかあ——なあ、大竹さん、それやったらいつか拳銃ピストル見せてくれへん？」

将吾「え」

華蓮「勤務中いっつも持ってるんやろ。見たいわあ、ほんまもんの拳銃」

将吾「すみません。喫緊の時以外はホルスタ——から抜くことを禁じられていますので」

華蓮「そうなん？」

将吾「はい。そやからそれは無理です」

華蓮「そうなんか。しょうもないわあ。一回
見たいなあ、ほんまもんの拳銃」

しばらく無言で歩いていく二人。

突然将吾と腕を組む華蓮。

華蓮「体動かしたらお腹すいた。なんか食べ
に行こ」

将吾「そうですね、ぼくもすきました」

腕を組んで歩いていく二人。

○尾崎家・康蔵の部屋の前（夜）

ノックをする華蓮。

華蓮「パパ、華蓮や。入ってもええ？」

尾崎（声）「どうぞ」

ドアノブを、回し部屋に入る華蓮。

○前同・康蔵の部屋（夜）

流れている石原裕次郎の『夜霧よ今夜
も有難う』。椅子に座って煙草をくゆ
らせている尾崎。

尾崎「なんや」

微笑む康蔵をまっすぐ見つめる華蓮。

華蓮「パパ、今度の日曜日、タフト貸してくれへん」

尾崎「ん、どういうことや。おまえ運転免許持ってへんやろが」

華蓮「免許はわたしが好きになりかけてる人が持つてる。けど車は持ってない。そやから貸してって頼んでる」

尾崎「どんな男や」

華蓮「名前は大竹将吾。同い年でわたしと同じ高卒や。縁あって居酒屋でいっしょに呑んで、まあ意気投合っていうのか、そんな感じで。最初のデートはボウリング。後の三回は映画見てん」

尾崎「縁あって、か」

華蓮「うん。そんで四回目のデートのとき、次は琵琶湖までドライブしたいってわたしから言うてん」

尾崎「おまえが時々ほろ酔いで帰ってくるのは知ってたけどな」

華蓮「たまに居酒屋行っただってええやろ」

尾崎「うん、かまへん。なにも咎めてんやない。おまえももう立派な社会人なんやからな。そんでその大竹いう人はなにやってる人や」

華蓮「警察官。東岡の派出所に勤務してる。試験受かったさかいに、あとちよつとしたら機動隊に入るそうや」

椅子を回し、華蓮に背を向け、灰皿で煙草をもみ消す尾崎。

尾崎「高卒の警官で、もうじき機動隊員か」

華蓮「そや。なにか文句あるん」

尾崎「いや。タフトは貸したる」

華蓮「ほんまに」

尾崎「ほんまや。けど一つ条件がある」

華蓮「条件？」

尾崎「わしの同期でな、大学病院で医学部の学部長やってる樺本云う男がいてる。こいつとこの前久々に呑んだ時に写真を見せたんや」

華蓮「わたしの？」

尾崎「ああ、正月に娘四人並んで撮った写真
や」

華蓮「そんなん持ち歩いてるのん」

尾崎「そや、そしたらそれ持ち帰った椿本

が次の日に『うちの長男坊と見合いさせた
い、本人も是非ともって言うてる』って電
話してきたわけや」

華蓮「見合いつて、わたしと？」

尾崎「決まってるやないか。四人の中で婿も
らってないのも嫁に行つてないのもお前だ
けやないか」

華蓮「お見合い」

尾崎「年は二十九。椿本といっしょの大学病
院に勤めてる。椿本は『あいつは天才や。

ひいき目抜きにしてあの年であの手術の腕
前は熟練の域に達してる』言うて自慢して
たわ。大言壮語する男やないからほんまな
んやろな、きつと——それから、おまえの
生まれのことについては伝えてある」

華蓮「車一台貸してもらうのに、なかなかの条件出してくるなあ、パパは」

尾崎「華蓮よう聞け。儂はおまえにこれから先も幸せな人生歩んでもらいたいって心底思ってる。それは育ての親たる儂の、尾崎家の責任であり、義務や。そのためには、これはほんまにええ話やと思う。椿本の家も代々医者の家系や。阿倍野でうちより大きな家に住んどる。別荘も持ってる。何不自由なく暮らせる未来が待ってるんや」

しばらく無言で見つめあう華蓮と尾崎。

華蓮「分かったわ、お見合いするわ」

尾崎「そうか」

華蓮「その代わりな、タフト借りに来た時、大竹さんに会ってほしい。ちよつとでええから」

尾崎「ああ、分かった」

華蓮「けど今のパパの話で分かったことがある。きつとわたし、もう本気で好きになつてしもうてるんやわ大竹くんのこと——お

やすみ」

尾崎「ああ、おやすみ」

部屋を出ていく華蓮。椅子を回し、机に片肘ついて顎を乗せる尾崎。

尾崎「——今日はキスはなし、か」

煙草を啜え、火をつける尾崎。

○尾崎家・邸宅の前

タフトが停まっている。その横に向かい合って立っている、華蓮に将吾と、

尾崎、圭子と千佳乃、華織と誠次に優

華もいる。うんざりした顔の華蓮。

華蓮「一族郎党うち揃ってのお出迎え、ありがとうございます」

ぼそっとつぶやく華蓮。

将吾「初めまして。ご息女様と親しくさせて
いただいております、大阪府警東岡派出所
勤務の巡査、大竹将吾です」

深く頭を下げる将吾。

千佳乃「どれほどの親しくや、巡査さんよ」

将吾「え、それは」

千佳乃「答えられんのかい」

香蓮「ちよつと、ばあば」

千佳乃「傷もんにしたんと違うやろな」

香蓮「ばあばっ！」

千佳乃「華蓮は尾崎家の大事な娘や。それは

ようわきまえておいてや」

将吾「はい、もちろんです」

背を向けて邸宅へ戻っていく千佳乃。

将吾「それでは大切なお車、お借りいたします。

す。安全運転を心がけ、必ず六時までには

戻ってまいります」

尾崎「うん、気いつけてな。ま、警官さんの

運転に間違いのないことは分かっているけど

な」

華蓮「な、もうええやん。早よ行こ大竹く

ん」

将吾「それでは行ってきます」

深く頭を下げ運転席に乗り込む将吾。

華蓮も助手席へ。

エンジンがかかりタフトが走り出す。

優華「華蓮ちゃん行ってらっしゃーい」

手を振る優華。遠ざかるタフトを見送

っている尾崎と圭子。

尾崎「絵にかいたような好青年やな」

圭子「ちよつと、あんた」

尾崎「そやから安心したわ」

圭子「え」

尾崎「初めて惚れた男とドライブデートくら

いさせてやつてもええやないか。おまえにも

いてたんと違うんかい、そんな男。さあさ、

優華お家入ろかあ」

ニヤツと笑い、優華と手をつなぎ邸宅

へ戻る尾崎。その背中を見ながらアカ

ンベエをする圭子。

○タフト車内

心地よげに運転している将吾。不機嫌

そうな華蓮。

将吾「さすが四輪駆動車や。走りがパトなん

かと全然ちがいますわ」

華蓮「へえ、さよですか。そらようござんした」

チラツと華蓮を見る将吾。

華蓮「なんなんよばあば、傷モンって。わたしはお茶碗でも花瓶でもないわ。ほんまに腹立つ」

無言で運転を続ける将吾の横顔を見る華蓮。

華蓮「このまま連れ込み旅館行って、傷モンにしてくれたかてええんやで。大竹く——

将吾」

何も答えず運転を続ける将吾。窓を開け顔を出す華蓮、叫ぶ。

華蓮「将吾のアホ、ボケ、カス！ アホ、ボケ、カス！ アホ、ボケ、カス！ アホ、ボケ、カスう！」

将吾「三回も言わんでええやないですか」

苦笑する将吾。むすつとした顔で腕組みをする華蓮。

○琵琶湖沿いの道

走り続けるタフト。

○琵琶湖湖岸

砂浜に止まっているタフト。人気のない湖岸の砂浜を並んで歩く将吾と華蓮。

二人、しばらく無言で歩いているが。

華蓮「もうっ！」

将吾の手を掴むようにして握る華蓮。

華蓮「こういう時は男の方から手え取らへん
でどうするのよ」

将吾「すみません」

将吾、繋いだ手を強く握る。

華蓮「あ痛たたつ、もう、強すぎ！」

慌てて力を抜く将吾を呆れた顔で見ている華蓮。やがて吹き出す。

華蓮「まったく、不器用極まりない」

手を繋いで砂浜を歩いていく二人。

×

×

×

砂浜に腰を下ろしている二人。

華蓮「ええ風。海やったら潮風やけど、琵琶

湖やから、なんて言うたらええんやろ」

将吾「琵琶湖風でええのとちがいますか」

華蓮「そのまんまやないの。風情がない」

将吾「そうですか、すみません」

華蓮「——お見合いはな、するだけやし」

将吾「そうですか」

華蓮「やっぱりなあ、親のメンツつてのも立
ててやらんとあかんしなあ」

将吾「そうですよ」

華蓮「なんなん、それ」

将吾「え」

華蓮「見合いなんかするなって言うてよ。そ
したらわたし」

無言のままにいる将吾。じっと湖面を
見ている二人。

華蓮「わたしな、捨て子やねん」

将吾「え」

華蓮「そやからパパとママやお姉ちゃんらと
血のつながりはない」

将吾「そうですか」

華蓮「え、それで終わり？」

将吾「はあ」

華蓮「けっこう衝撃の告白いうやつしたつもりやねんけど、わたし今」

将吾「まあ人にはいろいろありますから」

華蓮「もつとびつくりするって思ってたのに、
せがないこっちゃ」

砂浜に寝そべる華蓮。

華蓮「あーあ、大竹将吾はしょうもない男や

あ。ほんまにせがない男やあ！」

叫ぶ華蓮。左手を伸ばし、華蓮の右手を握る将吾。握り返す華蓮。互いに強く。湖面を見ている将吾。青空を見ている華蓮。二人の顔は微笑んでいる。

○大阪市内・某高級ホテル・個室食堂

豪華な料理が置かれた大きなテーブルを前にして座っている尾崎、華蓮、圭子。向かい合って椿本、息子の信一郎、

母の敦子。

背も高く眉目秀麗な信一郎が、優しい目で華蓮を見ている。

尾崎「なんやなんや二人とも、箸進んでへんやないか。ほれ、もつと食わんかい、呑まんかい」

圭子「ちよつとあなた」

椿本「えらい別嬪さん前にして、うちの息子も緊張してるみたいですなあ」

敦子「どないです、この辺で二人つきりにしてあげるというのは。なあ、信一郎」

信一郎「ええ、ぼくはかまいませんよ。華蓮さんが良ければですが」

視線が華蓮に集まる。

○前同・庭園

信一郎の少し後ろを歩く華蓮。

信一郎「お生まれのことは、すでに父から聞いています」

華蓮「え」

信一郎「まったく気にしませんよほくはそんなこと。でも——」

信一郎、足を止めて振り返る。

信一郎「お付き合いしてる男性のことは気になるかな、やつぱり」

微笑んでいる信一郎をじっと見る華蓮。

信一郎「警察官なんですって？」

華蓮「パパのしゃべり。ほんまなんでもかんでも……」

信一郎「なあ、トングラシよか、このまま」

信一郎「ぼく一人車で来たんですわ。地下駐車場に止めてます。ピャーつとドライブ、どないです。それとも豪華なお料理、食べに戻りましょか」

俯く華蓮。

信一郎「そしたら、戻りましょか」

華蓮「待って」

華蓮を見る信一郎。

華蓮「自信満々やなあんだ。そしたらピャーツとドライブ連れてってえや。けど無断は

いやや。車で出かけること話してきてえや。
心配性なんや二人とも。特にわたしのこと
になるとな」

微笑み頷く信一郎。

○路上

赤のセリカが走っている。

○セリカ・車内

運転している信一郎、助手席の華蓮。
カーラジオから流れてくるキャンディ
ーズの『あなたに夢中』曲に合わせて
ハミングする信一郎。

信一郎「あるんやなあ、ほんまに」

華蓮「え」

信一郎「一目ぼれっていうの。されたことは
あっても、自分がしたのは初めてや。写真
で見るよりよっぽど綺麗でびっくりした」

華蓮「写真映えさせへん顔で、えろうすみま
せん」

信一郎「誰もそんなこと言うてしませんやん。

おもろいなあ、華蓮さんは」

しばらく無言になる車内。

信一郎「華蓮さん、その警官さんより前に彼

氏は？」

華蓮「え」

首を横に振る華蓮。

信一郎「告白されたこととかは？」

華蓮「——それは、高校の時に何度か」

信一郎「そやろなあ。華蓮さん綺麗やから、

クラスにいてたらぼくもべた惚れで絶対告

白してるわ。で、今はそのお巡りさんと初

めてお付き合いしてる」と

車、赤信号で止まる。

信一郎「華蓮さん、ぼくは自分の欲しいもの

は必ず全部手に入れてきました。どんなこ

とをしても。親の力借りてでも。それが

ぼくの生き方です、きつとこれからも」

信一郎を見る華蓮。

信一郎「今まで嫁さん貰わなかったのは、ぼ

くが本気で欲しいって思う人に出会わへんかったからです。次の信号過ぎて左に曲がって少し行ったらモーターがあります。学生の時よう利用したもんですわ——華蓮さん、ぼくは今、あなたがほしい」

華蓮「ちよっと、なにを言うてるのん」

しばらく進み、指示器を左に出し、路肩にセリカを停める信一郎。華蓮をじっと見つめる。

信一郎「華蓮さん、よう考えてください。彼への気持ち貫いて、いっしょになれると思いますか？ お父様やお母さまは絶対に許されませんよ。お姉さま方もそうでしょう。わが子同然、いやそれ以上の愛情を注いで育てられてきたあなたを、喜んで明日をも知れぬ機動隊員の妻にされると思いませんか」

無言のままにいる華蓮。俯く。

信一郎「尾崎家の皆さまから受けたこの上ない愛情を返すに値しませんか、ぼくでは」

華蓮「——ずるいわ、そんなん」

信一郎「言うたでしょ。ぼくはどんなことしてでも欲しいものは手に入れてきたって」

車を発信させる信一郎。

信一郎「次の信号過ぎて左に曲がってええのやったら、左を向いてください。Uターンするのやったら、前向いたままでいてください。ええですな」

路肩から道に戻る車。しばらく走り信

号は青。過ぎて信一郎、華蓮を見る。

左を見る華蓮。

信一郎「日の高いうちには帰れるようにしますから」

華蓮（声）「へ将吾、かんにん。うちは幸せにならんとあかんねん」

ハンドルを左に切る信一郎。

○モーター・室内

ベッドの上、華蓮に覆い被さっている

信一郎。

華蓮「んっっ！」

信一郎「全部入ったで」

破瓜の痛みに涙を浮かべる華蓮。

信一郎「痛いなくなるまで、このままであるからな」

華蓮の髪を優しく撫でる信一郎。小さく頷く華蓮、手を伸ばして信一郎の背中を抱きしめる。

× × ×

ベッドに腰かけ、煙草を吸っている信一郎。彼に背を向け、蒲団をまとって横になっている華蓮。

華蓮「遊びとかいうのはなしやで。わたし今日、いちばん大事なもん捨てたんやから」
信一郎「バージン、そんなに大事にしてたんか。婚前交渉なんか今時当たり前やないか」

華蓮「そんなとちがうわ」

華蓮を見る信一郎。やがて彼女をガバっと抱き起こす。

華蓮「きゃっ」

腕の中の華蓮を見つめる信一郎。華蓮も目をそらさない。

信一郎「体知ったらますます自分だけのものにしたあなつた。忘れさせてしもたる、一介の警察官のことなんか」

華蓮「仕事は、続けさせてほしい」

頷き、華蓮に口づける信一郎。応える華蓮。

華蓮（声）「へ将吾、かんにん。ほんまにかんにん……」

華蓮の頬を涙が一筋伝う。

○四葉銀行・東岡支店行内

営業中の行内。華蓮以外の受付嬢が接客をしている。

新藤「尾崎くん、ちよつと」

振り返る華蓮。手招きをしている新藤。

華蓮「はい」

新藤のデスクまで歩く華蓮。

華蓮「なんでしょう」

新藤「ちよっとお遣い頼まれてほしいのや」

華蓮「お遣い」

新藤「うん。これな、東岡の派出所まで持って行ってほしいのや」

ホチキス止めされた五枚ほどの書類を

華蓮に手渡す新藤。

新藤「儂がまとめた当支店の防犯計画書や。

二年に一回各支店最寄りの警察か派出所に

提出せなあかんのや」

華蓮「東岡の派出所ですか」

新藤「そうや。なんか問題でもあるんか」

華蓮「——いえ、分かりました。行ってきます」

新藤「うん、頼むわ」

華蓮、礼をして銀行を出ていく。

○歩道

俯きがちに歩いていく華蓮。

○東岡派出所・内

デスクの書類を読んでいる将吾。

ドアの開く音に顔を上げる。華蓮が立っている。

将吾「あれ、どないしたんです」

華蓮「四葉銀行東岡支店の防犯計画書を持ってきました」

書類を差し出す華蓮。

将吾「そうですか、ご苦労様です——今日は落とし物やなかったんですね」

微笑みながら受け取る将吾。凝った顔のままの華蓮。

将吾「あれ？」

俯く華蓮。

将吾「——あの、今日へぐみの木へ行きませんか？ 実は一昨日辞令が出まして、機動隊への正式配属が決まったんです。来月からです。そうになると、なかなかお会いすることもできなくなると思いました」

華蓮「辞令が出ると自分から誘えへんのか」

将吾「え」

華蓮「もう遅い」

将吾「あの」

華蓮「もう遅いって言うてんのや！」

うずくまり泣く華蓮。黙ってその様を
見るしかない将吾。

華蓮「なあ、拳銃ピストル見せてえや」

将吾「え」

華蓮「拳銃見せてって言うてるんや」

将吾「前にも言ったように、喫緊の時以外は

ホルスターから抜くことは規則で禁じられ
ていて」

華蓮「それでも見せてって言うてるんや！

規則とわたしとどっちが大事なんよ！

見せてくれたら全部ちゃぶ台返しにしたる

わあ、アホお！」

将吾「——できません」

華蓮「アホお、将吾のアホお……」

すすり泣き続ける華蓮。彼女をじっと
見ている将吾。

○前同・前の路上

木村が腰を下ろして野良猫の喉を撫でながら煙草を吸っている。

木村「入られへんがな、なあ」

ニャアと鳴く野良猫。

○結婚式場・大ホール

披露宴。結婚行進曲が鳴り響き、華蓮と信一郎が登場する。拍手の中、花道を二人が進んでいく。

× × ×

華織、華穂、華澄ら姉たちとそれぞれの夫が共にしている円卓への、キャンドルサービス。涙ぐみながら、大きな拍手をする姉たち。

× × ×

華蓮、両親、育代が座っている席に来ると、キャンドルトーチを信一郎に預け、育代に近寄り抱きしめる。号泣し、

声にならない育代。

×

×

×

仲人の大学教授夫妻とともに、高砂に座っている華蓮と信一郎。

信一郎「疲れてないか」

華蓮「うん、大丈夫」

信一郎「遠慮せんと、少しは食べや」

華蓮「うん」

華蓮、卓の上を見る。綺麗に盛り付けられたカルパッチョを口にする。

華蓮「カンパチや」

●華蓮の回想

へぐみの木。カウンター席に並んで

座り、吞んでいる華蓮と将吾。

華蓮「通はな、こないして食べるんやで」

カンパチの刺身の上にワサビを乗せる

華蓮。

将吾「ちょっと、それ乗せすぎですよ」

華蓮「なにを言うてるのん。これくらいがち

ようどええんや」

刺身を醤油に付けて、口に入れる華蓮。

華蓮「——っは——っは——っは——っは——」

将吾「そやから言うたのに」

ゴホゴホとせき込む華蓮。

将吾「大丈夫ですか」

華蓮「な、なにをこれくらいで。大丈夫に決

まってる——」

将吾「全然大丈夫やないやないですか。女将

さん、お冷ひとつ」

光恵「はいはい。もう、あんたは。無茶した

らあかんがな」

水のグラスを受け取り、一気飲みする

華蓮。

華蓮「あー、おいしかった！」

将吾「泣きながらなにを言うてはりますの
ん」

華蓮「そしたら次は大竹くんの番や」

将吾「ぼくは普通に食べます」

華蓮「もう、そういうところがしょうもない
って、言うてんの」

将吾「ほっといてください」

笑いあう二人。

(華蓮の回想・終)

カンパチのカルパッチョを口に運ぶ華蓮。

四葉銀行の同僚女子社員たちが、祝意を伝えるにやってくる。満面の笑顔でそれに応える華蓮。

○へぐみの木〓店内(夜)

営業中の店内。カウンター席で将吾が一人吞んでいる。その様子を厨房から見ている光恵。

光恵「大竹さん」

将吾「はい」

しばらくじっと見つめあう二人。

将吾「これでよかったんです」

光恵「ほんまにそないに思ってるんか」

将吾「はい、ほんまです。これでよかったんです、お互いにとって」

光恵「あの子、待ってたんとちがうかなあ。

一人前の機動隊員になるまで待ってこれて、あんたが言うの」

立ち上がる将吾。

将吾「女将さん、大将、おいしい料理にお酒、ありがとうございます。寮の生活が落ち着いたら、また来ます」

振り返る小園。将吾を見て小さく頷く。

光恵「きつとやで」

将吾「はい」

光恵「けど住之江かあ。フラッと立ち寄るにはちよつと遠いなあ」

料金を受け取り、お釣りを渡そうとする光恵を手で制する将吾。将吾の目をじつと見つめる光恵。頷く。

光恵「ありがとう」

深く礼をする将吾。戸を開け外に出る。

光恵も外へ、少し遅れて小園も。

歩き出し、少しずつ二人から小さくなっていく将吾の背中。

光恵「頑張ってなあ。挫けたらあかんでえ」
立ち止まり踵を返し、二人に向かって
深く頭を下げる将吾。前を向き、歩き
出す。

光恵と小園、遠ざかる将吾の背中をじ
っと見ている。

(F・O)

○西成区・日の出アパート・外景(深夜)

(TⅡ昭和53年)

二階建ての安普請のアパート。

○前同・202号室・室内(深夜)

うずくまっているシユミューズを着た
情婦の理恵子(20)をなんども蹴っ
ている、パッチを履いただけの男、桜
塚(29)。胸には薔薇の刺青が入っ
ている。

理恵子「やめて、あんたやめてえ」

桜塚「くそが、このくそアマがよお」

理恵子を蹴り続ける桜塚。

桜塚「そないに、そないにあいつの事が忘れられへんのかい、寝言で名前呼んで飛び起きるくらいによお、ああ！」

　　這う這うの体で部屋の隅まで逃げる理恵子。鋭い目で桜塚を睨む。

桜塚「なんじゃいおまえ、その目は！」

　　理恵子のところまで行き、襟首掴んで往復ビンタをする桜塚。

理恵子「はっ……ほんまにしようもない男やっつてんな。ようわかったわ」

桜塚「なんやと、こら」

理恵子「イキがってるだけでなんにもようしやへん。そのしょうもない刺青がなにより
の証拠や」

桜塚「おまえ」

理恵子「教えたらか。あの人、成瀬はなあ、背中一面に天女の刺青入れてたんや。そらあ惚れ惚れするほど綺麗やったわ——あっちの方も凄かったでえ。アレに真珠二つも

入れててな、それで奥まで突かれるんや。
そらもう、天にも昇る気持ちやった。イ
クたびうち氣い失ってたんや。挿れてちよ
つと腰振ってすぐにピユツのあんたと大違
いや」

桜塚「黙って聞いてたらええ氣になりやがっ
て、おのれは！」

手を振り上げる桜塚。

理恵子「殴りいや、早お！」

氣圧される桜塚、手を止める。

桜塚「あんたなんか、あんたなんかなあ、女
殴ったり蹴ったりするしか能のない男や！
けど成瀬は違う、違うた！ たった一人で
神戸の三代目殺しに行ったんや、男見せた
んや！ できへんやろあんたにそんなこと
が！」

襟首掴んでいる成瀬の手を振りほどく

理恵子。

桜塚「はっ。仕損じとるやないかい。今頃神
戸の若いもんが血眼になって探し回っとる

わい。もうコンクリ詰めされて南港に沈められとるかもな」

理恵子「結果なんかどうでもええ。あの人は自分が男やってこと自分で証したんや。」

『いつかでつかいことやったる』っていう鳴瀬の言葉に嘘はなかった。うちはこれからあの人の思い出だけ抱いて生きていける。それで十分や」

桜塚、無言。

理恵子「朝になったら出ていくわ。もう二度と戻らへんから」

洗面所へ行きかける理恵子。振り向いて。

理恵子「ほんまによう似合^おてるわ、あんたにその刺青」

洗面所へと消える理恵子。水が流れる音を聞きながら、棒立ちでいる桜塚。

○大阪府警・機動隊・射撃練習場

隊員たちが射撃訓練を行っている。そ

の中に将吾もいる。全弾を中央的的に
的中させる将吾。

○四葉銀行・東岡支店・内

受付嬢として仕事をしている華蓮。胸
に椿本の名札を付け、にこやかに接客
している。

○大阪市阿倍野区・椿本邸外景

華蓮が歩いて戻ってくる。

○前同・邸宅内・キッチン

料理をしている華蓮。そこへ帰ってくる
信一郎。後ろから華蓮へ抱きつく。

信一郎「ただーいまー」

華蓮「きゃっ——もう、包丁持ってる時それ
やめてって言うてるやんか」

信一郎「そやから家政婦雇うたら包丁持たい
でもええって言うてるやん」

華蓮「うちは料理は自分でしたいの。何回も

言わさんといて」

信一郎「なあ、いつまで仕事続けるつもりや。家のことだけやってたらええつて言うてるやろ。そんななあ、ポチポチ子供作ろうや、なあ」

華蓮「ほんまに——言うてるやろ、あと一年は待ってって」

信一郎「結婚したときからずっと『あと一年』って言うてるやん」

華蓮「それは」

華蓮の尻を触りだす信一郎。

信一郎「椿本華蓮。衣食住、すべて高級なものに囲まれた優雅な生活を送る。にも関わらず、銀行員として仕事を続けている。夫は心臓外科医のエース。いずれは外科部長も夢ではなし。義理の親とは同じ家で暮らしているが、個別に生活を送っている。嫁姑の問題もなく良好な関係を築けている。以下同文——この生活になにか不満でもあるんか、華蓮は？」

首を横に振る華蓮。後ろ手で尻を撫でている信一郎の手をぺちつと叩く。

信一郎「俺は不満や。おまえが仕事ずつと続けてて、子供作らせてくれへんところが」

華蓮「そやから、あと一年待ってって言うてるやん」

信一郎、華蓮を向き直させる。

信一郎「ほんまにやで。俺、今日の日付、覚えておくからな」

頷く華蓮。

信一郎「よっしゃ、来年の今日まで言わへんわ。そのときは『あと一年待って』はなしやで」

華蓮「分かった——お風呂沸いてるよ。入ってき」

信一郎「うん」

華蓮に顔を寄せる信一郎。キスをする二人。

信一郎「俺は、ほんまに一日おまえに家に来てほしいんや。習い事や、近くの友達と

いっしょにお茶する、そんな毎日を送って
ほしいんや」

華蓮「うん、分かってる——ほら、早よお風
呂入ってきい」

信一郎「うん」

キッチンを出ていきかける信一郎。振
り返って。

信一郎「とりあえず汗流してくるわ。それで、
後でまた二人でゆっくり入ろ、な」

ウイंकをしてキッチンを出ていく信
一郎。

華蓮「アホたれ」

呆れたように、嬉し気に笑う華蓮。

○国鉄大阪駅・高架下の通路

通路壁面に日刊の夕刊紙がべたべたと
貼られており、サラリーマン風の男や、
労務者風の男たちが群がっている。そ
の中にいる桜塚。夕刊紙の大見出しは
〈六甲の白骨死体は鳴瀬宏〉。労務者

二人が話している。

男A「鳴瀬やったんやな、六甲山の死体は」

男B「わしはそないに思うてたけどな、最初

から」

男A「そうなんか。やっぱり神戸に捕まって
血祭りにされたんやなあ」

男B「いや、そうとも限らんで」

男A「なんでや」

男B「神戸に比べたら鳴瀬のおった大和侠誠
団なんかちっこいもんや。本気でドンパチ
したら組ごと潰されるわい。それを恐れた
侠誠団の連中が鳴瀬を口封じに始末した、
というのが儂の見立てや」

男A「なるほどなあ。さすがたもっちゃん、
高校出てるだけあるなあ。しかしこの鳴瀬
っちゅうのんはえらい根性の男やなあ」

男B「ああ。三代目も褒めてたって書いてた
なあ『儂を一人で殺りに来るとは、世の中
には大した男がいてたもんや』言うてな」

男A「ほんまに大したやつちゃなあ」

男B「ああ。極道の歴史に名前刻んだで、この鳴瀬宏っちゅう男は」

その場を立ち去る桜塚。電車の轟音が響く中、歩いていく。

○道路を走っているハイエース

ボディにヘトルコ・ムーンバニーの文字。

○前同・車内

後部座席に座っている将吾。

運転をしているマネージャーの高橋

(62)。

高橋「今日が最後のうちでの逢瀬ですなあ」
将吾「はい。あの、高橋さんにも送迎お世話になりました」

高橋「なにがあ。これも仕事でっさかい。けどお客さんからそんな言うてもろたの初めてですわ。ええお人や、ほんまにーカレンちゃんの本名は、聞いてはりますのん

か」

将吾「いえ、今日教えてもらうことになって
ます」

高橋「そうですか。引きが強い子やったんや
なあ、カレンちゃんは」

将吾「え」

高橋「お宅さんみたいな真面目で一途な方に
身請けしてもろうたんやから」

将吾「身請けとか、そんなんやないです。ほ
くは一切お金出してませんから」

高橋「さあ、そこですわ。お金の問題やあり
ませんのや。江戸時代の遊郭やおまへんの
やから、よほど太い借金でも抱えてない限
り、辞めよ思たら明日にでも辞められる。
けど、その先々のお金や暮らしの問題では
ある。カレンちゃんそこは考えたと思いま
っせえ」

将吾「どういうことです」

高橋「女はねえ、男よりずっと情念と打算の
間で揺れ動いてますのや。良家のお嬢様も、

客とってなんほのトルコ嬢でもねえ。けど、身も心も濡れ合うた者どうしが結ばれるいうかちゆうたら、そううまい事いきまへん。そやからお宅さんら二人は、ほんまに果報者やっと思いません、わたしは」

無言の将吾。同じく黙ってハイエースを運転し続ける高橋。

○トルコ風呂へムーンバニー〈店内

208号室の前。ドアをノックする将吾。

カレン（声）「はい」
部屋に入る将吾。

○前同208号室・浴場

全裸の二人。椅子に座っている将吾の体をくまなく洗っているカレン（28）。

× × ×
ローションを塗りたい体でマット

プレイ最中の二人。うつ伏せになった
将吾の体の上を、全身滑るようにして
愛撫をするカレン。

カレン「今日は処女やからな」

将吾「うん」

カレン「最初来たとき、カタカタ震えてたの
が懐かしいわ」

将吾「うるさい」

体を動かしながらくすつと笑うカレン。

カレン「縁って不思議やな。うちがこの源氏
名やなかったら、あんたも指名なんかして
ないやろから、こないになってへんもんな」

無言のままにいる将吾。

カレン「なあ、ほんまはまだ忘れられへんの
やろ、その華蓮お嬢様のこと」

将吾「——あほたれ」

カレン「ええんやそれで。けど、幸せにして
な」

身を起こし、カレンの体に覆いかぶさ
る将吾。見つめあう二人。

将吾「保証はできん。事が起きたら最前線や。

朝普通に出て、そのまま霊安室っていうこ

ともある職場や」

カレン「——あんな、わたしの本名はな」

言葉遮るように、カレンにキスをする

将吾。体をまさぐりあいながら、唇を

むさぼりあう二人。

○カレンの住むアパート・外景

よく晴れている。三人の女の子がはし

やぎながら、道を往く。

○前同・カレンの部屋

座卓を挟んで、カレーライスを食べ

ている将吾とカレン。陽光差し込む部屋

の中、二人、楽し気に。

○日の出アパート・二〇五号室・内

〈TⅡ昭和54年1月26日〉

鏡台の前に立っている桜塚。ワイシヤ

ツに白の上着。ズボンも白。サンングラスをかけて、チロリアンハットを被る。

桜塚「行こかいのう」

ゴルフバッグを肩掛け、右手にナツプザックを持ち部屋を出る桜塚。

○東岡派出所・前

自転車に跨り、警らに出かける木村。

○四葉銀行・東岡支店・行内

笑顔で接客をしている華蓮。

○機動隊隊舎・教室・内

座学の時間。真剣な顔でノートを取っている将吾。

○路上

桜塚が運転するシャルマンバンが走っていく。

○シャルマンバン・車内

運転している桜塚。

桜塚「鳴瀬、俺はおのれみたいな下手はうた
んからな」

独りごちる桜塚。

○四葉銀行・東岡支店・前の道

車を停める桜塚。顔にはサングラスに
加えて白マスク。ゴルフバッグを左肩
にかけ、右手にナップザックを持って
車から出てくる。入り口まで歩いて行
き行内に入る。

○前同・行内

ゴルフバッグから猟銃を取り出す桜塚。
桜塚「伏せんかいっ！」

桜塚、二発を天井に発砲。悲鳴が上が
りパニックになる行内。カウンターに
近づき、ナップザックを投げ入れる桜
塚。

桜塚「金出せ！ 十数える間に五千万や！

早よせんかい！」

吉村が内線電話の受話器を取る。

吉村「事務所っ、強盗ですっ！ 早く百十

番！」

桜塚「ワレ、なにしよんじゃあっ！」

桜塚、吉村に向けて二発撃つ。

吉村「ぐああっ！」

散弾がその胸に命中し、即死する吉村。

悲鳴が上がる中、一人の女性客と二人

の行員が脱出に成功する。

○路上

大慌てで逃げる女性客。そこへ通りが

かる木村。

客の女性「あっ、お巡りさん！ 強盗です、

銀行強盗！ その四葉銀行で！」

木村「えっ」

客の女性「大きな鉄砲持ってます！ さっき

行員の人が撃たれました！」

木村「なんやと！」

必死に自転車をこぎ始める木村。

○四葉銀行・東岡支店・行内

入り口に自転車を横倒しにして行内に
飛び込む木村。拳銃を抜き、カウンタ
ーの上の一万円札をポケットに詰め込
んでいる桜塚に向ける。

木村「銃捨てい、撃つぞ！」

木村を認める桜塚。

桜塚「くそポリ、やってみろやつ！」

威嚇射撃をする木村。桜塚ニヤツと笑
う。

桜塚「おのれらポリはどうせそんなこつちゃ。

こないするんじゃ！」

木村に向け発砲する吉村。散弾が木村
の胸に命中する。

木村「百十番、百十番……」

顔れ、こと切れる木村。

○前同・前

パトカーが一台到着する。警官二人が降り若い警官Aが行内に入る。

○前同・行内

Aに発砲する桜塚。胸に被弾し即死するA。

○前同・前

銀行のシャッターがゆっくりと降ろされていく。突入しようとしていた警官Bが木村の乗り捨てていた自転車や、近くの看板などをかます。四十センチほどの隙間を残し止まるシャッター。

○機動隊・隊舎廊下

同僚と話しながら歩いている将吾。突如スピーカーから流れる緊急放送。

声「緊急放送、緊急放送。大阪市内住吉区四葉銀行東岡支店において強盗事案発生。当

隊に出動用要請あり。犯人は行員、客を人質にとり籠城の様子。また死亡者が出ている模様。各自至急出動準備に入れ。尚、零中隊の者はそのまま隊舎にて待機、指示を待て。繰り返す。大阪市内住吉区四葉銀行東岡支店にて強盗事案発生……」

血相の変わる隊員たち。

将吾「東岡支店……」

立ちすくむ将吾。

○四葉銀行・東岡支店・行内

行内の隅に固まり、おびえている人質となつた客たち。うろついている桜塚。

桜塚「くそつたれが……おい、その階段の降り口に机運べ。バリケード作るんじゃ——どうせ外の階段からもうポリが二階に上がって来てるんやろ。早よせえ！」

机でバリケードを作る男子行員たち。

桜塚「よっしゃ、まあええやろ。おい、行員ら、ここに一列に並べ！」

桜塚の前に一列に並ばされる行員たち

三十七名。

桜塚「おい、支店長は誰や」

新藤「わたしです」

桜塚「おまえか——おのれがちゃっちゃと指

図して金運ばせへんからこんなことになっ

たんじゃ、クソがつ！」

新藤に向かって発砲する桜塚。胸に被

弾し血まみれになって吹っ飛ぶ新藤。

即死の新藤。悲鳴が上がる。

桜塚「やかましいんじゃ！」

天井に向け発砲する桜塚。

○前同・非常階段

非常階段を使って、二階の支店長室に

向かう警察幹部たち。

○前同・周囲

五百人以上の警察官と百台以上の警察

車両が規制線張られる中、銀行を取り

困んでいる。野次馬たちもどんどんと増え続ける。マスクも多数駆けつけている。そこへやってくる信一郎。

信一郎「華蓮、華蓮っ！」

叫ぶ信一郎。聞き逃さない新聞記者。

記者「あの、人質のご家族の方ですか。今のお気持ちをお聞かせくださいますか？」

血走った目で記者を睨みつける信一郎。

記者の襟首を両手で掴み上げる。

記者「ちょ、ちょっとあなたにするんですか。暴力はいけない、暴力は」

力を緩め、記者を離す信一郎。

信一郎「そやから勤めはもうやめろっていう

たんや。そやから、そやから……」

その場にしゃがみ込む信一郎。

○前同・行内

四人の遺体が転がる中、カウンターに腰を下ろして煙草を吸っている桜塚。

整列させられたままの行員たち。

桜塚「女の行員、服脱げ」

息を飲む行員たち。動かない。

桜塚「聞こえへんかったか。オナゴの行員は裸になれって言うてるんや。十数えるうちに言うことかへんかったら、人質のお客さん一人ずつ殺すぞお。ほんまやぞお。はい、いち、にーい、さーん」

最初に上着を脱ぎ始める華蓮。倅うよ
うにして服を脱ぎ始める女性行員たち。

× × ×

カウンターに全裸の女性行員を自分の
方に向かせて座らせている桜塚。椅子
に座りニタニタ笑っている。

桜塚「壮観壯観。心配すな、儂はオナゴの裸
は見慣れとる。これ以上手出しはせんわい。
おまえらは肉の盾や。裸の城壁や。これで
上にいるポリが入って来ても儂を撃つこ
とはできんわい。その前にお前らに当たる
んやからのう」

ケタケタと笑う桜塚。女性行員の何人

かがすすり泣く。そんな中、まっすぐ
桜塚を見ている華蓮。

桜塚「おう、その別嬪さん。さっきからえ
ろう氣い悪い目で見てくれとるの」

華蓮の髪の毛を掴み、顔を上げさせる
桜塚。視線を逸らさない華蓮。

桜塚「名前、なんちゆうんや」

華蓮「椿本です」

桜塚「結婚してんの？」

頷く華蓮。

桜塚「ダンナ、なにやってんの」

華蓮「医者です」

桜塚「ダンナ医者やのに勤めしてんのかいな。

またご奇特なことですなあ椿本さん——口
開け」

桜塚を凝視する華蓮。

桜塚「聞こえへんかった？ 口開けろって言
うたんやけど」

小さく口を開ける華蓮。そこに銃口を
入れる桜塚。

桜塚「儂なあ、ガキの時に人一人殺してるんや。誰や思う？ 集金先の奥さんや。そやからオナゴ殺すこともなんとも思わん。平気や」

銃口を深く華蓮の口に突き入れる桜塚。桜塚「見てみたいなあ、どないやって脳みそが飛び散るんか」

華蓮の両目から涙が零れる。

●へ華蓮の回想・尾崎邸・居間へ

テーブルを前に座っている尾崎家の面々。無表情な五歳の華蓮。その隣で華穂が左手、華澄が右手を強く握っている。

華蓮「ほんまにわたし、お家の前に捨てられてたん？」

頷く尾崎。

華蓮「パパやママの、ほんまの子供やないのん？」

千佳乃「そうや、そういうこっちゃ」

華蓮「ばあばも、ほんまのばあばやないのん

か？」

千佳乃「そうや。それが気に入らんかったら、うち出て行って、施設で暮らしてもええんやぞ」

立ち上がる華織。

華織「なんてこと言うんよ、ばあばは！ 華蓮はわたしの妹や！ 血い繋がってへんでもわたしの妹や！ ばあばのあほっ！」

華穂「ほんまや、ばあばのあほ！」

華澄「あほのばあば！」

苦笑する千佳乃。

千佳乃「あほにされてしもうたわ。華蓮、お前はなあ、恩を背負うてしもうた女なんや」

華蓮「オン？」

千佳乃「そうや。この尾崎の家への恩や。このことを知った以上、おまえはこれからその恩を返していかならん」

華蓮「どないしたらそのオンってやつは返せるのん？」

千佳乃「それはな、おまえがこれからもずっとずっとこれまでみたいに温い布団で寝て、ええ服着て、おいしいご飯を食べる、それを続けることで、返していくことができるんや」

華蓮「そんなんでええんか？」

千佳乃「ああ。拗ねて道はずれて、アプレにやらんような生き方を絶対にしていかなあかんのや華蓮は。例えこの家出て嫁に行くにしても、そんな暮らしを続けられる、そんな家に嫁いでいかなあかんのや。分かったか」

じつと千佳乃を見つめ続ける華蓮。

華蓮「ほんまにそんなんでええんか？」

千佳乃「ああ、ほんまにそんなんでええんや」

華蓮「そっか——なあ、ばあばはほんまのばあばやないけど、ずっとほんまのばあばでいてくれるんか？」

千佳乃「当たり前や。言うこときかんかった

り、行儀悪うにしとつてみい、今までどおりシツペじゃ。今日から二回じゃ」

華蓮「えー、なんでえ。二回とかいややー。

ばあばのシツペすごい痛いんやもん」

大泣きしている尾崎と圭子。泣きながら笑っている華織、華穂、華澄。

(華蓮の回想・終)

涙を零しながらも、桜塚から目を逸らさない華蓮。華蓮の口から銃口を離す桜塚。

桜塚「なかなか肝の座ったネエチャンやで。気に入った、あんたこれから儂の秘書な」
カウンター内の電話が鳴る。

桜塚「あー、椿本クン、電話取って」

受話器を取り、耳に当てる華蓮。

華蓮「はい、はい——替わります」

受話器を桜塚に渡す華蓮。受け取る桜塚。

桜塚「もしもし。これはこれは親愛なる大阪府警の皆さま。あ、やっぱり二階に来て

おられますか。あ、本部長さんでらっしゃいますね。わざわざご苦労さんにございます。今からねえ、こっちの要求書いた紙、うちの秘書にバリケードのところまで持って行かせますんで、あんじよう頼みますわ。言うこと聞いてもらえんかったら、人質の方々一人ずつ殺させていただきますんで。嘘やおまへんでえ。もうこっちは死骸がごろごろしてまつせえ」

電話を切る桜塚。

桜塚「あー椿本クン。メモ帳と鉛筆を持ってきてくれたまえ」

指示通り、メモ帳と鉛筆を桜塚に渡す
華蓮。

桜塚「すっぽんぽんの秘書持った人間も、後にも先にも儂くらいやろなあ」

下卑た目で華蓮を嘗めるように見てから、メモ帳に鉛筆を走らせる桜塚。

○前同・廊下

メモ帳を手に廊下を歩いていく全裸の華蓮。そこに桜塚の声が重なる。

桜塚（声）「へラジオ、栄養剤、人質の食事と飲み物を差し入れよ。暖房を少し上げろ。要求通りにしなければ、人質を一人ずつ殺す」

階段下、バリケードの隅にメモを置く華蓮。

○へぐみの木～店内（夜）

（2026年に戻って）

客で賑わっている店内。里菜と萌美が忙しく立ち働いている。入り口扉が開く。

里菜・萌美「はい、いらっしやいませ！」

立っている将吾（70）。すぐに将吾だと分かる華蓮。無言の二人。光恵、スマホをかざし。

光恵「ほんまに、最近はなんでもこれやなあ——黙っててごめんやで華蓮ちゃん。将吾

君な、三年ほど前からたまに寄ってくれる
んよ」

華蓮の隣に座る将吾。

将吾「お久しぶりです」

華蓮「ほんまに」

将吾「幸せに過ごされてましたか」

華蓮「そう言うてもええ人生やったと思いま
す。奥様はお亡くなりになられたそうで

将吾「はい、よう支えてくれました」

華蓮「そうですか。うちは五年前に」

将吾「――吞まれますでしょ」

小さく頷く華蓮。

将吾「里菜ちゃん、ハイボールを二つ。それ
からなんにしよっかなあ」

華蓮「ハイボール自分で注文できる男になっ
たか」

将吾「何年経ったって思ってるんですか」

華蓮「そやんなあ」

里菜「あの、クジラのお造り、どうですか」

将吾「へえ、いまだき珍しい」

光恵「魚屋さんがな、たまーに持って来てくれるんよ」

華蓮「クジラのお造りか、懐かしいなあ」

将吾「ほんまに」

里菜「そしたらクジラ入れてお造り四種盛り、二人前ご用意させてもらいますね」

華蓮「お孫さん」

里菜「はい」

華蓮「恋人はいてはりますのん」

里菜「え、あ、はい、まあ」

萌美「超イケメンですよ。マサピは」

里菜「もう、うるさい萌美ちゃん」

華蓮「マサピって呼んでるんや」

里菜「ほんまは翔太いのですけど、おばあちゃんが」

光恵「顔の彫りが深うて、若いころの津川雅彦によう似てるんよ。そんでわたしが面白がって雅ちゃんって呼んでたらいつの間にかマサピになってたんよ」

里菜「二人のときはちゃんと翔太って呼んで

ます」

萌美「あんね、マサピはリナピの高校のときの同級生でね、今は京都の割烹で修行してるんです。あと二年して戻ってきたら結婚してこの店いっしょにやるねんなー、な、リナピ」

里菜「もう、ほんまうるさい。口ばっかし動かしてんと手え動かして萌美ちゃんは」

萌美「はい、はい」

華蓮「リナピちよつと」

手招きをする華蓮。

里菜「はい？」

立ち上がり、カウンター越しに里菜に

耳打ちをする華蓮。座って里菜を見る。

華蓮「やっぱりおかしい？」

里菜「いいえ、ぜんぜんおかしくありませんよ。今でも好きどうしなんですよ」

華蓮「たぶん」

里菜「不倫とかやないんですよ」

華蓮「うん。連れ合い二人とも亡くしてる」

里菜「それやったら。年齢なんて関係ないですよ。落ち着いた感じのところ知ってるんで、後で教えてあげます」

ウインクをし、造りを拵え始める里菜。

華蓮「うん、お願いするわ——なあ」

将吾「はい」

華蓮「わたしのこと、こいこいちゃんって呼んでみて」

将吾「え、なんですか、それ」

華蓮「ええから、早よ」

将吾「そしたら——こいこいちゃん」

華蓮「うん、うん」

満足げに微笑む華蓮。訝しむ将吾の耳

に口を当てる華蓮。

華蓮「なあ、ラブホテル行かへん？」

ぎよっとして華蓮を見る将吾。

華蓮「そっかあ。しわくちやばあさんになつたからもうあかんかあ」

咄嗟に華蓮の手を強く握る将吾。

華蓮「あ痛たたつ、もう、強すぎ！」

将吾「あ、す、すみません」

華蓮「まったく不器用極まりない。あのころ
となんにも変わってへんやないの」

将吾「すみません」

頭を下げる将吾。やがて、どちらから
ともなく笑いだす。

光恵「仲のええことで」

ハイボールのジョッキを手に取り、軽
く合わせ微笑みあう華蓮と将吾。

○機動隊隊舎・隊長室

(1979年に戻って)

隊長、足柄(48)の横に立っている
大垣警部(射撃指導官・38)。二人
の前に整列している零中隊の六人。そ
の中に将吾もいる。

足柄「——というわけで、特に射撃技術に秀
でた者を選抜した今回が、初めての零中隊
出動事案となる。何よりも人質の救出に全
力を注ぐとともに、犯人の確保に務めてほ

しい」

大垣「今、足柄隊長が犯人確保と言われたが、その任務は非常に困難だと推察する。狙撃が必要とあれば、わたしが命を下す。その結果については、諸君らが負うべき必要はないともないと考えよ。隊長もわたしも諸君らと共にこれより現場へ向かう。いかんなく日頃の訓練の成果を発揮するように。いな！」

六人「はい！」

足柄「大竹」

将吾「はい」

足柄「報道で知っていると思うが、最初に銀行に突入し狙撃されたのは、東岡派出所の木村巡査だ。現在もご遺体は行内に残されたままだ」

将吾「はい」

隊長「私情は挟むな。気持ちの揺れは失敗に繋がる。ただ冷静に命令を遂行せよ。悼むのは全てが終わってからだ」

将吾「はい」

大垣「よし、これより本件現場へと向かう。

零中隊出動、護送車まで駆け足！」

六人「はい！」

駆け足で部屋を出ていく六人。大垣、
足柄も続く。

○道路

走っていく護送車。

○護送車の中

座席に座っている射撃部隊の六人。無
言。

○四葉銀行・東岡支店・行内

変わらず全裸の女子行員を盾にして、
カウンターに座らせている桜塚。

桜塚「あーあ、お前らの裸も見慣れたのう。
よっしゃ、服着てええわ」

女性行員の間少し安堵の空気が流れ

る。華蓮も服を着ようとするが。

桜塚「おっと、樁本クン。キミはそのまま、そのまま。あんたの体は、目の保養になる。キミは最後まで裸んぼの秘書を務めてくれ」

桜塚を睨む華蓮。

桜塚「不満か。ええんやで服着ても。一枚ごとくに人質さん撃つけどな。それでよかつたらどうぞ」

人質の客たちに銃口を向ける桜塚。悲鳴が上がる。俯き、小さく頷く華蓮。

桜塚「おい、お前こつち来い」

若い男性行員Aを呼び寄せる桜塚。

桜塚「服、交換じゃ。脱げ」

行員A「え」

桜塚「そやから、お前が儂の服着て、儂が

お前の服着るんじゃ。早よせえ！」

行員A「は、はい」

互いの上下を交換する二人。

桜塚「帽子とグラサンはそのときになったら

渡したる。儂といっしよに『人質解放や』
いうて外に出るんや。ええ考えやろ。これ
で儂は上手いこと逃げられる、儂はな」

行員 A 「そんな——」

ケタケタと笑う桜塚。その様子をじつ
と見ていた華蓮。

華蓮 「あの、トイレに行かせてください」

桜塚 「みんながしている通り、そのカウン
ターの隅っこでしなさい、桜塚クン」

華蓮 「大きい方です」

桜塚 「別嬪さんでもクソは出るかあ。しゃあ
ない、行つてき。けど帰りが遅うなったら、
お仲間一人ずつ殺すんで、そのつもりで」

立ち上がる華蓮。

○前同・女性トイレ前

捜査員二名が立っている。やってくる
全裸の華蓮。後ろを向く捜査員。その
前まで来て立ち止まる華蓮。

華蓮 「犯人は行員と服を交換しました。人質

の解放を叫んで外に出るつもりです」

顔を見合わせる捜査員。

華蓮「もう誰も限界が来ています」

踵を返しかける華蓮。

捜査員A「突入班が到着しました。すでに通

用口から行内に潜入しています」

捜査員B「彼らはバリケードのところまで、

この通路を這っていきます。チャンスがあるなら、合図をしていただけませんか」

頷く華蓮。

○前同・一階フロア

カウンターに座っている華蓮。差し入れの新聞を読んでいる桜塚。何度かウトウトし、ガクンと首を落とす。そのたびに何度も顔を横に振る。

○前同・通路とバリケード

匍匐前進で通路を進んでいく六人の突入班と大垣。バリケードの前まで到着

し、その陰から一人ずつフロアの状況を見る。将吾、全裸で桜塚の横に座らされている華蓮を見て息を飲む。

大垣「あの裸の女性行員がサインを送ってくる手はずだ。私の号令と共に突入せよ、いいな」

頷く六人。

○前同・一階フロア

桜塚、新聞を読んでいるが頭をガクンと下に落とす。

華蓮「お茶を淹れてきます」

応えない桜塚。寝息をたてている。ポットのところまで歩く華蓮。彼の周りに誰もいなくなる。バリケードの方に向かって、右手をゆっくり下ろす華蓮。

○前同・バリケードの陰

華蓮の合図に頷く大垣。

大垣「突入」

飛び出す六人の狙撃班。

○前同・一階フロア

将吾「伏せろっ！」

最初に飛び出た将吾が叫ぶ。その声に驚き飛び起きる桜塚。猟銃に手を伸ばす。突入班の一斉射撃。

八発中三発が頭、首、胸と桜塚に命中。

桜塚「殺す、ぞ……」

血まみれになり椅子から崩れ落ちる桜塚。

叫び声、泣き声の中、シャッターの隙間から警察官、機動隊員が殺到する。しばらく射撃姿勢のままにいる将吾。座りこんだ華蓮、顔を上げ、将吾を見る。将吾も華蓮を見る。駆け出し華蓮のところまで行く。泣き出す華蓮。

将吾「誰か、誰か毛布を早くこの人につ！」

華蓮「バチが、バチが当たったんや。将吾裏

切ったバチが当たったんや……」

すすり泣き続ける華蓮。

将吾「華蓮さん」

顔を上げる華蓮。拳銃を華蓮に見せる

将吾。

将吾「頭に当たったのは私の撃った弾です。

この拳銃で撃ちました」

見つめあう二人。また顔を伏せる。

運ばれてきた毛布を華蓮にかける将吾。

すすり泣きながら将吾に身を寄せる華

蓮。

華蓮「今しかない、もう今しかないんや。抱

きしめて、お願い」

頷き、華蓮を抱きしめる将吾。

華蓮「もっと強う！」

強く華蓮を抱きしめる将吾。

怒号飛び交う大混乱の中、将吾が華蓮
を抱きしめ続けている。

(了)

